

傾城戀飛脚

八

新口村段

〔解題〕 安永二年十二月廿三日から曾根崎新地の豊竹此吉座初演。作者は菅専助・若竹笛躬。本曲の系統及びその梗概については、近松名作集下巻の「冥途の飛脚」の解題御参照を乞ふ。
こゝに収めた新口村は本曲の下巻であつて、近松の原作とほど同じ筋立により、文に多少の改修が施されて居るに過ぎない。梅川忠兵衛の戯曲中最も知られてゐる一段である。筋をいへば、原本ではこのあとで、梅川と忠兵衛とは尋常に名のつて出て繩にかかり、こゝへ尋ねて來た梅川の兄の忠兵衛は、雪中で大立廻りの舉句、龜屋妙閑の刑を盗んで金子をかたつた丹波屋八右衛門と龜屋利平とを捕へて代官に引渡すといふので終つて居る。

詞 節季候だい／＼。だい／＼は節季候。つことに言はれ。詞コリヤひどい。いおうへの塵。拂出す表へ。詞てい古
お目出たいは節季候。通らしやれ／＼かさま貴ふ節季候より。内の様子はせ手買紙屑。お内儀様。紙屑はないかな。
親方衆と違うてこちとらは水呑百姓。く候と。逝ぬれば女房は糸ぐるま。オいやな人ぢやわいの。京や大阪と
こなた衆にやる米はないわいのと。地正月までは休みまそと納戸へ。取込み違うて在所に紙屑はない物ぢや。勝手

知らぬ人ぢやさうな。町方へ出て買はる忠兵衛が。勢はる身さへ雪風に。凍えみ。其けいせんを手に提げて走つたと
つしやれ。地阿呆な人と笑はれて。つる手先懐に。暖められぬ。石原やら滑つたとやらで。代官所からきつ
ぶやきながら見廻しつゝ。シテ歸る程な道を足びきの。大和はこゝぞ故郷の。い詮議。孫右衛門様は久離切つて。お
く同行二人。廟院補陀落や岸打つ波は。フシ新口村に着きけるが。詞コレ。爰上の構ひはなけれど。血を分けた親子
三熊野の那智の。ナホス地お山の詮議とはわしが生れ在所。四五丁行けば實のなれば。ア、いとしや年寄つてきつい
は。人目にそれと白木綿。笈摺。フシか親。孫右衛門殿の所なれど。不通とい案じ。こちの人も馴染故。若しこの邊
けた順禮姿。詞お喰様火を一つ借さつひ繼母なり。殊に今身の上を。お日りうろたへて。見付けられはさつしや
しやりませ。爰は何といふ所かな。爰にかけるは大きな不孝。この薬草は忠れぬかと。モいかい氣苦勞。庄屋殿か
は大和の新口村。煙草の火は出しませぬ。手の内も法度でござんす。ア、懼フシマア。ア、門の口。詞忠三、リや印判ぢやと。節季師走に爰らあた
貪な在所だなど。地家内をきよろ／＼殿内にか。ア、久しう逢ひませぬと。りはけいせん事で賣返る。ア、うたて
ねめ廻し次のフシ村へと出でて行く。地つつと這入れば女房は。詞アノこちの傾城やと。地知らねば遠もフシな
調ほんに今日程うさんらしい者のたんのは今庄屋殿へ。どつからござんしてかりけり。地二人ははつと胸に釘。打
と来る日はない。納戸へ這入りもなる何の用。わしや戴除の治郎兵衛後家のち點頭いて成程々々。詞大阪でも其評
まい。ドリヤタ飯の持へと地前前に仲人で。近い頃こゝへ來た故。前方の判。わしらは女夫連で年齋の參宮。なつ
忍ぶ身の跡や先。長地人目をつゝむ頬。息子殿。大阪へ養子に行て。傾城とや。よつと呼んで来て下されぬか。オ、そ
冠り隠せど色香梅川が。馴れぬ旅路をらいふ物をたんと買うて。人の金を益は易い事。一返り往て来ませう。が

京のお寺が鎌田村の道場へお下り。先さきではよつ程ほどわしが戻もどりも遅おそい。コレ女めの人ひとす。

と。我が身の上より案あんじられ。今一度持瘤もちがの傳つが婆ば。コリヤ又村一番の茶飲ちあく。

中様なかがた。飯が仕掛けつかはてある程に。出来損なまこ京の兩親ふたおやに。一日逢うて死に度とうござまみぢや。ア、ソレそこへ来る置頭巾おきずきんは。

大貧乏おほひじやうであつたが。年貢ねんこうに詰つつて娘むすめを

中様なかがた。飯が仕掛けつかはてある程に。出来損なまこ京の嶋原しまはらへ賣うり。マよい客に請出うけだされ。なはぬやうに。差しくべて下んせや。したし。恩のある養子親ようししん。妙閑様めうかんじやうや許ゆき金持かなぎの奥様おくじやうになつて。掣ひきの蔭かげで田も五

と櫛くしはづして フシ出だて行く。娘むすめ婿ぶつ婚むすの。おはへも不埒ふりの詫び。そなた丁てい。藏くらも二ヶ所の俄分限にわかん。ア、同じ女

は門口もんぐはたと締しめ。

掛金かせねかけて フシう

の兄忠兵衛殿おとしゆうえの。志も無むにした斷り。

郎おとこを請出うけだしても。わしはそなたの親達おやぢだつとりと暫まことにし。詞こともなかりしが。詞ことコレ地じ今一度いちどしみしみ逢あひたいと。エ、愚痴ぐち

忠兵衛様ちゆうしやう。ほんに爰ゑは劍つるぎの中なか。斯すうし自じなれば。ないじやくり。娘むすめわたし

な。モウもうそんそんな事こというて下さんす

て居ても大事おほないかえ。ア、いやいや。もたんと恩おんのある兄様おとしやうが猶戀ゆれんしいと。

な。アノ親仁おとしにんは。弦げんかけの藤治とうじ兵衛べいえ。

男氣おとしな忠三郎ちゆうさんらう。賴のぶんで今夜こんやは此處しそうに泊と互ひに手てを取り抱いだき合あひ。涙なみだの聲こゑはら

八十八はで一升いっせうの飯めしを残のさぬ達者たつしやうもの。

り。死死ぬると古郷こくの土ど。產うぶみの母おやの墓所はいしょ一いっ所しょに埋うまれそなたにも。

娘むすめはア雪ゆきが降ふるさうなと。

ハア雪ゆきが降ふるさうなと。

は。西受けにせいの反古障子はんこじやうしを開ひらけ。

鍼はで母おやちや人ひとを立たて殺さした。思おもへば

スエカリおろ涙梅川なみうらも。それは嬉うれ見みやる野風のぜいの畠道はたぢ後ごしぶきの吹雪ふきゆきに

親おやの敵てき。ア、コレもうよいわいな。

しうござんせう。さりながら。わしがは。傾かたげて急いそぐ。阿彌陀あみだ尊そん。道場參だうじょうり今腹はら立てたて。何なんの役えに立たたぬ事こと。オ、

父様おとしやう。母様おとしやう。京の六條珠數屋町ろくじょうじゅすうやまち定さだぞ。續つづきける。詞ことアレあれ。

ありや皆みなア、アレあれ。

あそこへ見みえるが親父おとし父めてこの間詮議まんじぎにあうて居ゐさんせう。在所ざいしょの知しつた衆しゆ。先まなは櫛くしの口くちの水右う様よう。此世このよの別れお暇ひま乞うひ。せめて餘所よそ母様おとしやうは眩暈めまい持もしもの事ことはあるまいか。衆しゆ門もん。マひどい呑人ののぢやぞい。其次つぎは荷くわ。

ながらお頬ほほなりとも拜まうと。遙々とほほと

妾まで來た念願が叶うたか。エ、有難い。
い。エ、く。あの綾子の肩衣が。
が。孫右衛門様かいな。アほんに親子は争はれぬ。目元なら。鼻筋なら。
前によう似た事わいな。調サア。それ程よう似た親と子が。
さぬは。何とした身の因果。ア、お年も寄り。足元も弱つた。是が今生のお暇乞ひでござりますと。
れば梅川は。今が。お顔の見初めの見納め。詞私は嫁でござんする。夫婦は今をも知れぬ命。百年の御壽命すきて後。
未來で孝行致しましよと。口の内にて。獨言。夫婦諸共。手を合せ。涙に咽び居る。孫右衛門は老足の。
休み／＼。フシ門を過ぎ。野口の溝の薄氷。滑るをとまる高足駄。鼻緒は切れ横様にどうと轉べば南無三と。忠兵衛もがけど出られぬ身。梅川周章て

走り出で抱き起しつ締め。調申し／＼。どこも痛みは致しませぬか。
え。お年寄の危ないこと。オ、マ危ない事。お足も洗ひ。鼻緒もすぐて上げ
いて。フシ内へ伴ひ上り口。フシ腰膝撫でて勞はれば。孫右衛門は氣の毒
もませう。マア／＼こちへ。地と手を引いて。フシ内へ伴ひ上り口。フシ腰膝
撫でて勞はれば。孫右衛門は氣の毒もませぬ。お年寄
も寄せ。足元も弱つた。是が今生のお年寄。ア、若い女中の優しい年。
だなか知らぬが忝ない。お蔭で怪我も致しませぬ。ア、若い女中の優しい年。
だなか思召して。嫁子もならぬ御介抱。幸ひ庭に萬葉は澤山。鼻緒はわ
形見にさせたうござんすと。塵紙袖にしがすぎますと。懐さがして取出す押包む。フシ涙にそれとは知られけり。
肌に付けさせて。父御に似た親仁様の地詞の端に孫右衛門。扱はさうかと思
ふ。ア、申し爰によい紙がござんす。紙捻ひねつて。地上げましよと延愛の。盡きぬ涙を押隠し。調ムンこな
たの男に此親仁が。似たというての孝行か。エ、嬉しうござる。が腹が立ち

ますわい。わしも年たけた悴めを。様つい探し出され。繩かゝつて引かるゝねばならぬ。ア、どうぞ来てくれば子あつて久離切り。大阪へ養子にやつ時。ア、孫右衛門は日水晶よう勘當しよいが。爰邊りを舞ひ／＼。舞たが。傾城といふ魔がさして。人の金た。出かしたと。譽められるのがおりひ付きはせまいかと。四年この方逢ひを盜んだとやら。揚句に所を走つた噂。や悲しい。譽められるのが俺や。悲しもせず。懐かしい子の顔を。見ぬ様に此大和は生國なれば。十七軒の飛脚屋うござるわいの。ア、それを思へば一／＼と。難行ながら神だゝきもノコレ。仲間。お上からも隠し目附。或は順禮日も。地早う往生お救ひと。拜み願ふ不便さからでござるわいの／＼。ア、古手買ひ。節季候にまで身をやつし。は今参る如來様御開山コレ。マ佛に嘘とは言ふものゝ。若死するも人の一生。この在所はモウ／＼詮議最中。そがつかれうかと。どうと平伏し闇え泣義埋ある親を牢へ入れ。おめ／＼と逃れも誰故なれば。ソ、其傾城の嫁御き。梅川も聲を上げ。忠兵衛は廢子よ隠れは。末世末代不孝の惡名。所詮造故。モ近頃愚痴な事なれど。地世の譬り手先を出し伏拜み。ヌエテ身を揉み歎れぬ命なら。一日なりと妙閑殿を。早にもいふ通り。盜みする子は憎うならくぞ。道理なる。地猶も涙を押拭ひ。う牢から出すのが孝行。ササ、。

て。繩かける人が恨めしいとはサこの調様子聞いたか聞かぬか知らぬが。子覺悟極めて名乗つて出い。ア、今ぢや事。謂久離切つた親子なれば。よからうを釣出さうとお上の計ひ。養ひ親の妙ない／＼。今の事ではないわいやい。が悪からうが。構はぬ事とは思へども。閑殿。昨日牢へ入れられたけなわい。シタガ。それも親の目にかゝらぬ所で。大阪へ養子に往て。利發で器用で身をエ、サ、、それでつく／＼思ふに繩かゝつてくれ。ヨエ、現在血を分けもつて。身代もよう仕上げた。地あののは。實の親を便りにして。若しも忍んた子に。早う死ねと教へるも。浮世の様な子を勘當した。親は大きな白痴者で來はせまい。來たらば何ぼう不便義理か。地フシ是非もなや。地なぜ前かと。指差しられ笑はれたら。エ、マ、でも。養子親への義理あれば。かくまたに内證で。斯う／＼した傾城に斯うマ、其嬉しさはどうあらう。調今にもふことは抜て置いて。親が繩かけ出した譯で金が入ると。便宜でも仕をつ

たら。久離切つても親子ちやもの。隠餘りに四十兩。遣ひ果して二歩殘る。にござつても構ひはあるまい。オ、居の田地を賣立てゝも首繩はかけまい。金ゆゑ大事の忠兵衛様。科人ほけんじんにしたもに。皆あいつが心から。其身もせまい。私から嘸ぞ。憎からうお腹も立たう苦をしをつて。いとしほなげに嫁御に迄。思ひも寄らぬ憂目を見せ。知音近附親にまで隠れる様に身を持ちなし。此世の別れにたつた一目。逢うて進ぜろくな死もせぬ様に此親は産付けぬ。下さんせと。奥の障子を明けるを引エ、憎い奴ぢやーーと思へども可愛ゆ止め。詞ア、コレやくたいもないーーござると。泣沈みフシ分けたる。血筋く。たつた今も言ふ通り。たとへ詞はれぬ世の義理は。涙湧出る。水上とぞ。哀れなる。涙の隙に巾着より。はかはさいでも。顔見合はしたりや。せど。互に親とも我が子とも言はずい金一包み取出し。是は京の御本寺様繩かけるか。俺が口から訴人せにや。ら聞ゆる多くの人音。一人を奥へと突へ上げうと思うた金なれど。嫁と思う養親への義理が立たぬ。何ば義理が立てやるではない。只今のお禮の爲。是てたいとて。親の手づからどう繩が掛けて路銀にちつとなと。遠い所へ往て下けられうどう繩がかけられうぞいの。を抜ければ御所街道。サ、、、早うされと。渡せば梅川押戴き。詞お心オ、御尤もで御座りますーー。そんなと地ノシ氣を揉む所へ。順禮姿の附いた此お金。逆様ながら戴きます。ら顔を見ぬやうにと。傍に有合ふ手八右衛門利平も共に蚕取眼。役人大勢地大阪を立退いても。私が姿に立て拭取り。泣くーー後に立廻り。慮外な打ち連れだち。詞此内がきぶさいなとば。借駕籠に日を送り。奈良の旅籠やがらと。フシめんない千鳥。詞御不自地どかーーーと込入る所へ。組子一郎人かけ來り。西所は長谷の山つゞきに

梅川忠兵衛と名乗る者。休み居つたを二人も共にフシ飛んで行く。地孫右衛門
追取り巻き。搦め捕らんと致せども。門は飛立つ嬉しさ。天の助けか忝いと。ふ。平沙の善知鳥血の涙。長き親子の中々手に合ひ申さずと。地聞くより小裏道見やつて伸上り。詞オ、さうぢや別れには。カンやすかたならで安き氣頭扱てこそ／＼。來れ續けと引返せば／＼其道ぢや。ソレ。其藪を潜るなら。も涙。涙の三更浮世なり。